

主 文  
原判決を破棄する。  
本件を長崎地方裁判所に送戻す。  
理 由

弁護人児玉啓太郎及び被告人の控訴趣意は末尾に添附する控訴趣意書に記載する  
とおりである。

職権を以て調査するに、原判決は「被告人は長崎県北松浦郡a村b番地に於て、その父Aと同居してAの耕作名義となつていり、田五反三畝二十八歩をAが予て老令且病弱で耕作不能であるため自己に於て其農業經營一切を支配し、おる米穀の生産者である。従つてA名義を以て割当てられた米穀を供出すべき義務を負ふものであるところ、昭和二十三年十一月二十七日同村長よりA名義の下に昭和二十三年度産米三石二斗五合を政府に売渡すべき旨の供出割当を受けた旨を判示するに止り、被告人に対し同村長より同年度の供出割当すなわち農業計画を指示したことは判文上明でない。或は原判決は父A名義でなされた供出割当の指示は、事実上の生産者たる被告人に対しなされたと同様の効力があるという見解に出たものかも知れないが、もしそうだとすればこの見解は不当である。ただしA名義でなされた供出割当の指示はAに対するものというの外はないのであつて、たとひAと被告人が同居の親子であり、A名義の田地について被告人が事実上の生産者であつても、Aに対する行政上の指示を以つて被告人に対する指示と同視すべきものではない。殊にその指示の如何が供出の具体的義務の存否、従つて供出違反の罪の成否というような法律上重大な結果を左右することに鑑みれば、右の見解は到底これを是認することができない。これを要するに原判決は食糧管理法第三条第一項違反の罪を判示するについて理由不備の違法があるから破棄を免れない。

よつて論旨に対する判断を省略し、刑事訴訟法第三百九十七条、第三百七十八条第四号前段に則つて原判決を破棄し、且つ本件は当裁判所において直ちに判決することに適しないから、同法第四百条本文に従つてこれを長崎地方裁判所に差戻すこととし、主文のとおり判決する。

(裁判長判事 谷本寛 判事 竹下利之右衛門 判事 秦亘)